The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北宋思想界の動向
Author(s)	木南, 卓一
Citation	懐徳. 1958, 29, p. 15-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

北宋思想界の動向

木南卓一

一

「宋は天下を保つこと先後三百餘年、その間政治や風氣の盛衰は免れなかつたが、天子や爲政者、更には一般智識人が道藝・經術・道德・性命のことに努めたので、その學術は周代よりも盛な有樣であり、多くの書物も出版された。（然るに）宋の國勢振はず、遂に滅亡したのは學術の故であるといふ人もあるが、これは功利的な觀點からの說であつて、必ずしも道を知る者の論ではない。」と宋史藝文志に言つてゐる。ここに「道を知る」とはその時代に顯現された精神それ自體の意義なり價値なりを認め尊重することと解し得べく、この點より看れば宋代の思想・學術は中國の精神界に於てのみならず、汎く人間精神文化に於ける一つの輝しい高峰であつたと言ひ得よう。夫の朱子によつて集大成された宋學卽ち程朱性理の學もこの宋代の思想・學術の典型であると言ひ得るものである。然るに朱子が深く繼承し集大成した北宋時代の周・張・二程、更には邵の如き人々は、狹義の性理の學にて論ぜられる系譜的な捉へ方では不十分なのであつて、彼等自身で夫々偉大であり個性的であつた。そして此等の人々の個性的な相違は卽ち北宋思想界の重要にして且つ豐富な面を顯はにしてゐると言ふべく、更に看來れば、北宋時代には范仲淹・歐陽脩・司馬光・王安石・蘇東坡等の勝れた政治家學者が輩出して、互に影響し合ひつつ、宋代の學術・思想を隆盛ならしめたのである。かくて北宋思想界の考察は此等の人々の獨自な思想の織り成す相を洞察しなくてはならぬと思はれるのである。

朱子は、北宋の人の論は麁大、今（南宋）の人の論は細小であると評してゐる（語類一二九）。北宋の人の論の麁なるは缺點ではあらうが、その人物が大きく、その論に正大の氣が充溢してゐるのであらう。人物の偉大と學術

の正大とは相應する。或は抽象的思索、論理の精密は尊ぶべきも、その論が細小となつて、思想を支へ發展さすべき人物の偉大さに缺くる點があると思はれる。北宋時代には天下國家を以て己が任となす氣風が溢れてをり、學術・思想が政治を導いた、政治と學問とが高度に一つであつた（これは儒學の理想である）。彼等の議論・思想は實事・實境に觸れて發し、活潑にして正大であつた。かくて北宋時代は儒學の新しい自覺の時代であつたことを知る。曾つて唐代後半期には禪宗に傑出した人が多く、「儒門淡薄にしてかかる俊傑を收拾し得なかつた。」[註一] 朱子は名寺中に畫くところの諸禪師の魁偉雄傑であつて、禪門に多くの俊傑が引き去られたと痛歎したが（語類四、及一二六）、今や儒門に俊傑が集つて思想界をリードし、政治を指導したのである。然しその儒學は性理の學といはれる事にても察せられる如く、老莊・佛敎（禪）の哲學的思想と深く交渉して成立したもの、此の點は上述の諸々の思想家の考察に卽して考へてゆくことにしたい。看來つて北宋思想界の考察は多角的なるべきを知るのである。而して此の際、北宋の勝れた思想家達の人物や思想の特長を鋭く把握しつつも、その中特に周張二程の說を尊重して集大成した朱子の說に據つて考察をすすめることは極めて有益な方法であると思ふ。

二

宋史の忠義列傳に、「忠義の氣が五代に至つて殆ど盡きたが・范仲淹・歐陽修・唐介等が出て、直言正論を以て朝廷に唱へたので、士人達は名節を以て相高め廉恥を以て相尙び、盡く五季の陋を去つた。そこで北宋の滅んだ靖康の變には勤王の志士が所々に出、宋の亡ぶに當つても然りであつて、これは短時日の敎化の致すところではない。」と言ふ。而して日知錄（十三）宋世風俗の項にこの說を擧げ、五代と宋との風氣の變化を論じては、易の剝の上九碩果の說をあげてゐる。この碩果は卽ち儒敎精神に相當するとみることが出來よう。そしてこれの自覺・復興を促した人物が范仲淹であつたのである。彼は宋代士人の氣風を新たに振作した人であつた。朱子も言ふ、

祖宗以來の名相、李文靖・王文正の諸公の如きは只恁地に善きも亦得ず。范文正の時に至つて便ち大いに名節を勵し士氣を振作せり。故に士大夫を振作するの功多しと爲す（語類一二九）。

然るに范仲淹が大いに活躍したのは仁宗の時代であり、就中慶曆の盛時であつたが、それは宋朝が開けてより約七十年の後の事である。范仲淹が生れ、學んだ時勢は如

何なるものであつたか、又彼が活躍し得べき體制は如何に準備されてゐたであらうか。太祖・太宗・眞宗の時代の大體に就いて考察してみたい。

後周の世宗の重臣として天下統一の志業を援けた趙匡胤が、世宗の崩後強ひて黄袍を着せられて宋朝を開いたのは西紀九百六十年であつた。太祖とその弟の太宗の二代の間に宋朝天下統一の事業は略々成就したのであるが、その政策の重要な點は唐末五代に於ける節度使の横暴の弊を去るべく兵力を中央に集め、中央よりは文官を派して政治の實權實務を司らしめ、以て中央集權的な官僚國家形體を整へたといはれる。又三代目眞宗に至つては外夷（契丹）と和睦し（一〇〇四年）、内政につとめたので、開國以來約百年にして慶曆・熙寧の盛時が出現したのである。

太祖は天資寛仁多恕であつた。朱子は漢の高祖と共に聖人の材ありと評してゐるが（語類一二七）、その政策は天才的な後周の世宗の志業に因るところが大であつた。（語類一二七。内藤湖南著「中國近世史」參照）。彼は後周の幼帝はじめ一族を殺さず却つて優遇し、又天下平定に當つても人を殺さしめなかつた。而してこれに就いては後周の宰相范質や曹彬の努力によるものであつたことが「宋名臣言行錄」に記されてゐる。彼等はもと太祖と同輩であり、太祖に對しても毅然たる態度を持して畏れしめるところがあつたが、而も太祖には此等の人々を感ぜしめ誠を盡さしめて善く用ふるの大度があつた。朱子の所謂「英雄の手段」（語類一二九）があつたのである。朱子は又「國初の人材は是れ五代の時に已に生じ得了る。」（同上）と言ひ、「名臣言行錄」に多く載せてゐる。ここに注意されることは賢相范質をほめつつも太宗が「世宗に對して臣節を全うして死ななかつた。」と評したことである。これは太宗の陰險な性格を示す一例であらうし、寧ろ酷評であらう。李昉は宋朝には仕へず、五度辭した後漸く仕へたが、太宗が彼を勞つた時、「臣前日周に事ふるを知るのみ、今周に事ふるの心を以て陛下に事へん。」と言つたことは、易姓革命の變に遇つた人としては已むを得ぬ點もあり、殊には太宗としては彼の意を多とすべきであらう。彼等が毅然として天子と爭つて正義を守つたことは立派であつた。

然るに「名節」といふ點からは太宗の酷評亦當るところありとも言ふべく、かくて士風を振ひ、名節を勵ます氣風は宋朝科擧の制にて官吏となつた人々の間にこそ起るべきものであることを知るのである。已に太祖は自ら殿試を行ひ士人の養成に努めるところがあつたのである。ここに宰相の氣風の變化といふことが考へられる

が、內藤博士は、「冠準までは唐代の宰相の如く自ら責任をとる覺悟があつたが、王旦からは人物は正しいが自己の權限外の職務には口を出さず、天子の大權を敢へて犯さぬといふやうな宋代風の宰相が出來た。これは太宗から眞宗の間に宋の制度も定り宋代の氣風が出來た故であるが、その次の仁宗の時になつて特別な士人の風が出來て、之によつて宋代の永續した基を開いた。そしてこれに最も功のあつた人が范仲淹である。」（中國近世史）と言はれてゐる。看來つて、國初より眞宗の間は安靜を事とし、制度の確立に努めた時期である。朱子は太祖の時の政策は一時の權宜によるべき點が必要であつたことは認めつつ、太宗・眞宗の間に眞に妥當な禮數制度を整へ學を講ずることがなかつたのを遺憾としてゐる。又一面では、氣には盛衰があるもので、盛な時は政治がまづくとも弊害が現はれないものだとも評してゐる（語類一二七）。宋朝は眞宗・仁宗の間が隆昌の氣が最も強く動いてゐたのであらう。仁宗寬仁の資によつて內治に於ては太平が續き、契丹との關係も自ら和ぎ、人々は干戈を知らぬといふ有樣となつた。この如き狀勢のもとに宋代の學術・思想が興り、政治と學問とが高度に一つとなり、宋代の思想界の特色を發揮したのである。

三

先づ范文淹に就いて考察してみよう。彼は太宗の端拱二年（九八九年）に生れたが、幼時唐の宰相履冰の子孫ときいて發憤、苦學した。民間の隱れた純粹な學者戚同文の影響があつたと思はれるが確かなことは不明である。二十八歲進士の第に登つたが、以後顯はれず、丞相晏殊の推薦で祕書閣校理となつて中央の官についたのは四十歲の時であつた。彼の活躍は以後六十四歲にて沒する迄の間であつたが、自說を開陳して容れられぬ時は潔く退くといふ態度で、波瀾の多い後半生を送つたが、深く一貫した人格見識は當時の士人に大きな影響を與へたのである。朱子は

范公平日胸襟豁達、毅然として天下國家を以て己が任と爲す（語類一二九）。

と評してゐる。彼が三十九歲、母の喪中にあつて、時の執政に遺つた書に、

一心の戚を以て天下の憂を忘れず、四海の生靈長く太平を見んことを庶ふ。

と、天下國家に志あることを披瀝し、續いて、

我が宋の天下を有してより、之を經し之を營し、之を長じ之を育して、以て太平に至る。累聖の功豈に大な

らずや。然れども否の極は泰、泰の極は否、天下の理循環するが如し。惟聖人のみ卦を設けて象を觀る。窮すれば則ち變ず、變ずれば則ち通ず、通ずれば則ち久し。變を知る者にあらざれば其れ能く久しからんや。此れ聖人易を作るの大旨にして以て天下を理むる者に授くるなり。

と言つて、天下の事を極論する原理を明かにしてゐる。彼の見識は易の思想に由來する。夫の先憂後樂の論もこの觀點から出て來る。變を知るは經綸を明かにし通・久を得る所以であり、ここから彼の改革論が生れて來るのである。而して彼は易を生かしつつ更に六經の大體に通じて道義を以て徹底した。これが彼が目指した人格の根本眼目であつた。ここに到つて學術が政治の根柢となつたと言ひ得よう。夫の「岳陽樓記」は朱子も「范文正公の好處には歐陽脩も及ばず。」（語類一三九）と評した程の名文であるが、ここに彼の考がよく述べられてゐる。岳陽樓は唐代以來杜甫をはじめ遷客騷人が多くここに會して名作をのこしたところ、彼范仲淹も「朝暉夕陰、氣象萬千なり。」と敍し、次いで霪雨霏々の時、又春和し景明かなる時にこの樓に登る騷人の情を、悲喜の極處に就いて文學的に敍述してゐる。これは卽ち詩賦の世界を十分に理解し認めてゐるのであるが、此は畢竟物を以て悲喜をなすもの、境に應じてうつろふものといふ外はない。これを文學的に勝れて表現する意義は認めつつも、もつと深い古の仁人の心に沈潛してゆかんとする。卽ち江湖の遠きに居ても廟堂の高きに居ても終始一貫した心を持たんことを願ふのである。この一貫した心は「誠」といふも可であり、この誠の心は彼に於ては窮・變・通・久を洞察する活き活きとした見識となつてはたらくものである。故に「天下の憂に先だつて憂へ、天下の樂に後れて樂む。」とは岳陽樓記一篇の眼目であり、范仲淹の根本精神である。彼はこの樣な態度を以て毅然として廟堂の高きに立つたが、勢力に迎合し、先例を守るの名義を借りて一身の利害の爲に趨舍する官吏との間に摩擦を起し、宰相呂夷簡に反對して睦州や饒州に貶せられた。かかる范仲淹の態度に同調した余靖・尹洙・歐陽脩も貶せられたが、これについて蔡襄は四賢一不肖詩を作つたところ、これが都下に傳播されて大きな反響を呼び、言論尊重の氣風が釀成され、正論を以て終始せんとする士人が現はれる至つたのである。而してこれが朋黨の論が生れ君子小人の對立を生み出す結果ともなつたのである。慶曆三年には呂夷簡・夏竦が退いて、范仲淹・富弼・韓琦・歐陽脩等が用いられたので石徂徠は慶曆聖德詩を作つたが、その中で夏竦を大姦と呼んだ。此の事も黨爭を激化

せしめる因となつたが、今や新進の士人達の強力な指導によつて時勢の風氣が好轉して行くのである。[註四]

次に歐陽脩に就いて考へてみよう。彼は范仲淹を中心として興つた慶曆の風氣の中の人であり、それを承けつつ獨自の見解を持つた人である。彼が文學の方面で古文を唱導して言論の自由な發達に功ありしことは屢々指摘されてゐる。宋史列傳には彼が韓愈の後を承けて文章の道を興し、「斯文の正氣をして以て大道に羽翼し人心を扶持すべからしむ。」と評してゐる。[註五] 宋代の策論の流行、時務論の發展は歐陽脩に負ふところが大である。彼は道義の立場に立つて君子と小人、道義と功利を辨別し名節を重んじた。小人の僞朋と君子の眞朋とを積極的に論じた「朋黨論」は當時に大きな影響を與へたのである。[註六]

彼の政治に就ての考は范仲淹とは相當異つてゐて、簡易・循理・明白・鎭靜を以て主意として、民之を便とすれば足れりといふ樣な點があつて、これは夫の醉翁亭記にも現はれてゐる。その人の樂を樂しむの說は莊子の魚の樂を說く箇處を取用しつつ彼獨自の考を寓してゐる。この如き考は又排佛の論たる「本論」にもよく窺はれる。彼の說によれば、外來の佛敎が盛であるのは中國本來の思想が衰へてゐる故であつて、排佛の根本は禮義を修めることにある。この本が修まれば、佛敎の患が深くその勢が盛であつて敵し難くとも、馴致の道が開けるといふ。彼はこれを自然の勢と言つた。「物極れば則ち反り、數窮すれば則ち變ず、此理の常なり。」ともいふが、この理を達觀しつつ本を修めてゆくべしとするところに彼の見識が立ち、人をして深く肯かしめるのであらう。彼は極めて合理的な人と言はれるが、彼の議論には內面的な深さが見られない。李翺に答ふる第二書(居士集四十七)に於て、

脩、世の學者多く性を言ふを患ふ。故に常に說を爲して曰く、夫れ性は學者の急とする所にあらず、而して聖人の罕に言ふ所なり。……六經の載する所は皆人事の世に切なる者、是を以て之を言ふこと甚だ詳かなり。性に至りては百に一二も之を言はず、或は因りて言ひて及ぶも性の爲に言ふにあらざるなり。

と言つて、性理學的な省察を無用の事と貶してゐる。この點は次節に述べる隱逸的思想家をまつて深めらるべきことであり、廟堂の高きに居りて政治・文學に本領なり靈性なりを發揮した歐陽脩には望み得ぬことでもあらうか。なほ彼が「易童子問」にて示した如き合理的實證的態度、「集古錄跋尾」によつて金石學をひらいた功績、五代史・唐書の編纂など宋代の學術を隆盛ならしめた點も注意される。

次に、政治家として偉大で、歐の理論、韓の重厚と評せられた韓琦に就いて考へてみたい。彼は仁宗朝に范・富と共に革新政治に參畫し、議論各々別れても殿を下つて和氣を失せず、未だ嘗つて爭はざる如くであり、眼中に社稷あるのみであつた。これを神宗・哲宗の朝より末梢的となり漸く激化した朋黨の爭にのみ終始して眼中に國家なきに至つたのに比して大いなる相違といふべきであらう。殊に韓琦は君子小人の別を嚴しくするよりも大きく抱擁する膽氣と度量を示した。これには歐陽脩も服したが、ここに彼が政治家としての偉大なりしを知る。[註七]

彼曰く、

琦平生弧忠に仗りて以て進み、大事に遇ふ毎に卽ち死を以て自ら處る。幸にして死せざるは皆偶ま成るなり。實に天の扶持せるにて琦（自らの）能くする所にあらざるなり（名臣言行錄）。

以上、范仲淹・歐陽脩・韓琦に就いて夫々の本領とする所を考察したが、共に社稷の臣として天下を以て自任する點は共通してゐる。この事は富弼・文彥博に就いても言へることで、彼等は廟堂の高きにありて士風を振作し名節を重んじたのである。學問と政治との高度の一致を身を以て毅然として實踐し、而も夫々個性のある人格を形成してゐた此等の人々の北宋思想界に與えた感化・影響は極めて大であつた。

四

「宋世學術の盛なる、安定・泰山之が先河たり。」と全祖望は言つてゐる（宋元學案卷一）。胡安定・孫泰山・石徂徠は范仲淹と略々同時代の人で、仲淹に認められ尊重せられた。元來榮達に心なく科學の業に意なく、共に泰山に讀書すること十年、聖賢を以て相期し、「江湖の遠き」にあつて天下の道義を重からしめたのである。ここに唐末五代以來の民間私學の傳統がみられるが、これこそ前述日知錄に言ふ「碩果」といふべきものであらうか。この三人の外に陳古靈・士建中・王開祖・戚同文の如き民間にあつてその學に努めた所謂隱君子がゐたが、就中胡安定が最も篤實にして純粹平正、多くの生徒を敎へて師道を興した。その經義齋・治事齋の制は、范仲淹の議によつて京師・州縣に學校が設けられるや、取つて以て範とされるに至つてゐる。石徂徠の如きは「吾が勇は孟軻に過ぐ」。と言つたが、その强い正義感、强烈な人格は民間に在りつつ大きい影響を當時に與へたのである。此等の人々が道義の重きを以て自任して敢へて出でず、范仲淹はじめ爲政者が彼等を敬重したところに、道義尊重の氣風が强く動いてゐたことを看取するのである。

胡安定の弟子劉彝が神宗の「胡瑗（安定）の文章は王安石と孰れか優れる。」との問に對して、

胡瑗は道德仁義を以て東南の諸生を敎ふ。時に王安石方に場屋に在りて進士の業を修む。臣聞く、聖人の道は體あり用あり文あり。君臣父子仁義禮樂の歷世變ずべからざる者は其の體なり。詩書史傳子集の法を後世に垂るる者は其の文なり。擧げて之を天下に措きて能く其の民を潤澤ならしめ皇極に歸する者は其の用なり。國家累朝士を取るや、體用を以て本と爲さず、而して其の聲律浮華の詞を尙ぶ。是を以て風俗媮薄なり。臣が師瑗、寶元明道の間に當りて尤も其の失を病み、遂に體用の學を明かにして以て諸生に授け、夙夜勤瘁すること二十餘年、專ら學校に切にして、蘇胡より始りて太學に終る。其の門より出づる者無慮一千餘人なり。故に今の學者夫の聖人の體用を明かにして以て政敎の本と爲すは皆臣が師の功に由るなり。

と答へてゐる。夫の程伊川も深く安定に學ぶところがあつた。安定の標榜した體用を明かにすることは、經義齋・治事齋の二齋を設けた主意でもあるが、これが所謂宋代性理の學の先河となつたことは十分首肯出來るところである。體・用・文の中から文を去つたこの立場は、更に徹底せしめるならば體・用の中から用を去つて「體」を明かにすることに歸着する。出でて仕へず、純粹な學術の立場にて天下國家のあるべき體を明かにして、天下の道義を支へたのである。看來つて宋代の思想の考察にはこの點の顧慮が極めて重要なことを知るのである。

然るに、此等民間の學者の標榜した道義の說が、性理學として周・張・二程等によつて發展させられて行くに就いては、老莊的な隱逸思想の流の人々によつて深められるといふ事が必要であつた。（この事は從來宋代性理學の研究に於て看過され勝ちであつた。）夫の周濂溪や邵康節の如き人々はこの點を十分考慮するのでなければ十分な理解が得られないとさへ思はれるのである。尤も、この隱逸的な思想を道義の根柢を深く捉へるやうに積極的にはたらかしめた力は上述の如き道義尊重の風氣の旺盛なるに由るものであらうが。

五

宋史隱逸傳には、遯の上九の肥遯、蠱の上九の「王侯に事へず、其の事を高尙にす」[註八]を以て隱逸の意義を十分に認めてゐる。ここに宋の精神文化一般の根柢に隱逸的な思想が流れてゐることを思はしめられる。朱子も名臣言行錄前集の終に、陳摶・穆修・李之才・种放・魏野・林逋の諸人の言行を擧げてゐる。この點について稍考察し

てみたい。

陳摶は五代の後周の時、已に世宗に召されてゐるが、元來「經綸の才を負ひ、五季の亂離を歴て四方に遊び、志遂げられずして山に入つて隱居」した人である。太宗の時に召され、清淨を以て治を致すべきを言ひ、又「優好の所は久しく戀ふる勿れ、得志の地は再び往く勿れ。」といふ樣な箴言をのこしてゐる。彼の說はその人柄と合致して當時の人を感ぜしめたのであらう。彼は又易を好み、數學を敎へたが、これが穆修・李之才を經て邵康節に傳つて大いに發展したことは注意される。穆修は天聖のはじめ尹洙と共に時の尙ぶ所を矯めて力めて古文を作り、歐陽脩の前驅となつたが、李之才が邵康節に敎へた次の言葉がより注意される。曰く、

科擧の外に義理の學あり、義理の學の外に物理の學あり、物理の學の外に性命の學あり。

性命の學卽ち自己の心性の深奧に沈潛して得られる境地を最高究極とすることは、一轉して倫理的立場を深化させる原動力となるものであらう。この點を解明したのが邵康節・周濂溪であつたとみられる（後述）。而して右の物理の學を自然の勝景幽致を愛してその深き味はひを感得し、或は藥物として養生をはかる事をも含めて考へるならば、それは性命の學と根本的に違はないのであつて、隱逸思想家達の境地を最もよく表はすものは「自然」なのである。內なる性命への沈潛と外なる自然の觀照とは同一のことであつて、ここに形而上的な廣い世界が開ける。易を愛するこころもこれであらう。又自然を詠ずる詩が深い境涯をあらはすものともなり、それによつて人の性情が陶冶され高貴にされる。これを明確に把握したのが性理學で、「格物」は一草一木にも天地の理が宿つてゐるとの考の上に立ち、それは人の性命の理を明かにすることと同一の事と考へられてゐるのである。[註九]

「自然」をこの樣に捉へる境地は六朝以來深く養はれて來たものであらう。陶淵明の「心遠」に相應した「自然の中の眞意」もこれである。更に遡つては老莊的な思想、降つては唐代の禪宗、特に六祖慧能以來强調された只沒禪の體驗がこの「自然」を深く精神的に捉へる境地を養つたのであらう。林逋の梅花の詩の句「踈影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏。」は當時極めて有名であつたが、朱子はこの句について、「言外の意を自得すべきであり、この句に精神あるを看なければならない。」（語類一一四）と言つてゐるが、この朱子の說はこの時代の自然觀の根本眼目であらう。而してこれは性命への沈潛であり、人間精神の深さ、靜けさである。當時の人々は倫理の外にかかる世界にて精神を高尙にし、以て倫理をも

高め、性理の形而上的世界を樹てたのであつた。隱逸思想を大いに發展せしめた邵康節に就いては次節に考察するが、その詩句「梧桐の月は懷中に向つて照り、楊柳の風は面上に來つて吹く。」に就いて程明道は「眞の風流人豪なり。」と評してゐる。自然のとらへ方によつてその人の思想・人物を評價する事が出來ると考へられたのであらう。周濂溪の「愛蓮說」も蓮の中の好意思を看取したものに外ならない。程明道の「秋日偶成」の七絕の如きはその高き境地を表はしたものとして最も有名である。[註十]

かくて隱逸思想の根本たる性命・自然は、一個人の心性の內奧を窮めることが卽ち宇宙の根柢に參入し、或はそれを洞察することに外ならないといふ事を敎へる。宋代の思想はこの樣な思想に導かれて天地人を貫く廣く又深い境地を開拓してゆくのである。宋代の隱逸は遯の上九・蠱の上九といふ陽德を以て解されたが（宋史隱逸傳にて）、この陽德は卽ち性理學の發達の一大原因となつたことに於て最も勝義に解し得るのであろう。而してこの點の最も勝れた解明者は邵康節であり、一歩進んでは周濂溪であつたのである。

六

邵康節はその「氣質が本來淸明で、又養ひ得て純厚。」であつた（語類百）。程明道も「自分は多くの人に接したが、その人物の雜ならざる者が三人ある、それは張橫渠と邵康節と司馬光とだ。」（伊洛淵源錄卷五）と言つてゐる。彼は洛陽に居ること殆ど三十年、「貧に安んじ道を樂しみ、未だ嘗つて眉を皺めず、寢息の處を安樂窩と爲し、自ら安樂先生と號」したが（同上）、彼の許に多くの名士が訪ねた。彼は宋の太平の氣分を滿喫した人であらう、而も經世の事を忘れなかつた。ここに彼の人物の大きさがあるとも見られる。彼は自分の墓誌銘を程明道に依賴したことも興味深いが、その墓誌銘に曰く、

先生少かりし時、自ら其の才を雄なりとし、慷慨大志あり。旣に學んで高遠を慕ひ、謂へらく先王の事必ず致すべしと爲すと。其の學益々老い德益々邵きに及んでは、心を高明に玩び、天地の運化陰陽の消息を觀て以て萬物の變に達し、然る後頹然として順ひ、浩然として歸る。

この言葉は邵康節の本質を最もよく言ひ表したものであろう。彼の人物の大きさは朱子も「他の腹裏這箇の學あり、能く宇宙を包括し古今を終始す。……人豪と謂ふべし。」（語類百）と言つてゐる。これは門人が朱子に、

近日學者、拘檢を厭ひて舒放を樂しみ、精詳を惡みて

簡便を喜ぶ者あり。皆邵堯夫の人と爲りを慕はんと欲す。

と語つたのに對する答の中の言葉であるが、邵康節の境地は右の如く誤つて慕はれ易い傾向があることもこれにて察し得るのである。然らば彼の境地の高明・純厚の根柢は何であらうか、それは形而上的な觀である。而してその觀を精密にしたものは易の象數であらう。象數によつて天地の變化が盡されるのである。一・二・四・八・十六の如き加一倍の說、世・運・會・元の說の如きはこじつけの如き點が多いが、彼はこれによつて變化を盡し、法則的理法的に觀ずるのである。盡すとは宇宙を包括する統一的な境地であり、その境地にて理法を觀ずるところに、性理學の根本に觸れるのである。但しこの觀は敢へて行爲に出でようとしない、否、行爲は問題とならないともいふべき境地で、ここに隱逸的思想の本領が看取されるのである。この形而上的な世界への指向は前節の自然觀をより省察的にしてゐると言ふべく、この如き考へ方が夫の「物を以て物を觀る」の反觀の說となるのである。我を以て物を觀るのではない、我といふものがない、それは物を理中の物として觀ることになるのである。彼は又「物を以て物を喜び、物を以て物を悲しむ。此發して節に中る者なり。」（觀物外編）といふが、節に中るとは理に中ること、それは萬物の變に應じ「虛心にして動かざる」を得る所以である。故に「物を以て物を觀る」は、その人の心が至つて靜かに、至つて虛にして可能なことであらう。これは老莊流の隱逸思想を本としつつ、觀に於て天地の心、更には先天の心を持ち得た事を意味するのである。

かくて邵康節の到り得た境地は靈妙であつた。彼の心・性・道の說が道學を專ら修めてゐる者よりも勝れてゐる場合があることを朱子は指摘し稱揚してゐる。[註十一] 彼が宋代性理の學に於て有する意義を十分認めて「伊洛淵源錄」に重く取り扱つてゐるのである。然るに「近思錄」には邵康節の說が入れられてゐない。これは兩書の性質の相違にもよるが、邵康節の說に倫理的な面が稀薄なるが故と思はれる。而し隱逸思想の流を多く承けつつより多く倫理性を持つ周濂溪が朱子によつて道學の祖として尊重されたのである。[註十二]

周濂溪に就いて考へてみよう（以下周子と略稱する）。

「人品甚だ高く、胸中洒落たること光風霽月の如し。」と黃谷山に評された彼は、一面山林の士として仙風道氣あり、一面地方官としてその政事精絕なるところがあつた。我々は周子に於て宋代に於ける隱逸思想と倫理思想との最も典型的な融會を看ることが出來るのである。彼

の人物と學問とは宋明學者に深い影響を與へた。已に二程子も彼に會つてから科擧の業を厭ひ、慨然として道を求める志を起した。ただ周子と二程子との學問・思想上の關係に就いては從來から問題とされてゐるところである。これに就いては周子と二程子の夫々が宋代學術の典型をなしてゐること、及び朱子に於て集大成され、兩者の意義を夫々十全に認められたといふ點を考へねばならぬと思ふ。而して朱子が周子を近世道學の祖としたのは、隱逸思想を活かして倫理の根柢を明確に捉へたが故であらう。

周子は邵康節と同じく易に得るところが大であつたが、象數によらず、「太極圖說」にて形而上學的な思索を述べ、「通書」にてそれを倫理學的に展開せしめた。ここに已に邵康節と異る點を明かに看得るわけである。而して「物を以て物を觀る」の境地は、「太極圖說」に於て「無極にして太極」の一句で高明に表明されてゐると言ひ得よう。[註十三]「太極圖說」に於ける無極・主靜・無欲はもと隱逸思想に屬するものであるが、これが太極を理としてとらへる上に活かされてゐる。太極を理としてとらへるとは無極による眞を二氣・五行・萬物に於て觀ることに外ならない。而してここに太極と人極とを分ける分析眼がはたらいて、倫理の世界の深い理解が說かれる。かくて「通書」の世界では中庸の誠の說が新しく生かされて來るわけである。「通書」が從來の儒敎のの基本的概念を復活新生せしめた書物であるとも看得る理由も以上の點にある。周子の書は「語意峻潔にして渾成、條理精密にして疏暢。」（朱子大極圖說解附錄）と評されてゐるが、彼は渾然として高明な境地を說き、そこから概念分析の世界に降り、惡の幾にも論及しつつ、常に渾然なる全的境地に歸つてゐるとでもいふべき樣子がある。これ卽ち周子の人品の高き所以である。彼は孔子を贊して「道德高厚、敎化無窮、實に天地と參り四時と同じきは、其れ惟だ孔子か。」（通書）と言ふのは、「太極圖說」の天人合一の境地の體現者としての孔子を言ふものと考へ得る。而して聖人を誠・神・幾の三を具へたものとして說いて、

寂然不動なるは誠なり。感じて遂に通ずるは神なり。動いて未だ形はれず、有無の間なるは幾なり。誠なれば精し、故に明かなり。神なれば應ず、故に妙なり。幾なれば微かなり、故に幽なり。誠神幾なるを聖人と曰ふ（通書）。

この如き聖人は周子によつて示された新しい理想的人格である。この點からも周子の思想が北宋思想界の一典型であるといふ事を知ることが出來るのである。而してこ

こに程子の學も亦一典型といふべく、程子は再び廟堂の高きに在つて天下を以て己が任となす環境にあり、その時勢も王安石の出現によつて大きく動きつつあつたことが考へさせられる。

七

安樂窩に住して宋代太平の氣分を滿喫した邵康節は天津橋上に杜鵑の聲を聞いて宋の衰運を豫言した。王安石も仁宗朝に已に「萬言書」を上つて時弊を指摘し時務を極論した。彼は又神宗に對し「本朝百年無事劄子」(註十四)を上つて、無事の中に惰氣滿ち、今や一大改革の時期なるを論じて神宗の信任を得た。當時の政治に積極性なく、冗吏冗兵、また外貢の費多く、天下一統と平和持續との故に物資の流通が盛となり、貨幣經濟の發達は商人の兼併、農民の窮乏を招いて、ここに有爲の君主神宗と王安石との「千載一遇」(東都事略)の投合によつて一大改革が行はれるに到つたのである。

王安石の政治思想は「萬言書」によつて窺ひ得るが、彼には「先王の政」といふ理想があり、それは人材の養成、理財による富によつて人情を導いて教化を致さんとするのである。最も注意すべきは「其の理財に於ける、大抵法なく、故に儉約すと雖も民富まず、憂勤すと雖も國强からず。」(註十四參照)との見解で、この理財の法が新法となつた。均輸法・青苗法・市易法によつて商人の兼併を抑へんとし、農田水利・保甲・免役・保馬の法の如きも皆國家の權力を以て積極的な組織のもとに政治を建て直さんとするものであつた。激しい反對にも拘らず十八年間に亙つて繼續された新法政治も、神宗の死と共に中止され、結局は失敗に終つて小人の跋扈を招いた點は非難されるが、然し宋朝の國家體制とその百年間の弊とに鑑みて、王安石が掲げた理想は極めて妥當であつた。范仲淹によつて高唱された名節、先憂後樂の說も、大きな國家體制の出現と共に法が考へられねばならなかつた。更にはそういふ法を活用すべき學術・思想・教育が相應しなければならなかつた。ここに於て程子が「大學」を重んじた意義を認め得る。「大學」は國家體系を本として說かれ、その修德の本としての格物致知は夫の法・理の思想に繫つてゐるのであり、これに居敬の工夫を加へて道德と法との統一を圖つたと考へられる(この思想が全體大用の思想と展開した。)朱子も「熙寧の時は改革を要すべき狀態にあり、王安石の意圖や見解は正しいが、反對に遭つてその主張を强行したのが惡く、この爲に天下が亂れて人々は因循を以て當然とするに至つた。王安石は德行もあり正人であるが、その學術が不正

で道理をみることが透徹せず、爲に說く所行ふ所皆差ふ結果となつてしまつた。あの時神宗が一眞儒を得て用ひたならばよかつたのに。此も亦氣數の然らしむる所であらう。」と評し、更に「明道を用ひたならば必ず大いに效をあげたであらう。その『論十事劄子』には志節慷慨のところがある。韓琦・富弼ならば只舊を守るのみであらう。『然らば溫公は如何。』溫公は別に一格なり。」（語類一二七、及一三〇）と言つてゐる。

朱子が司馬光を右の樣に評したのは、その德望・人格の極めて優れてゐて、憂國の心その一生を貫き、國を活かし世を救ふ功の甚大であつたが故である。蘇東坡は司馬光の德の偉大なるを誠と一とに由ると評し（司馬溫公神道碑）、「鶴林玉露」（卷七）には韓琦に學問が加つたのが司馬光であるとも言つてゐる。

司馬光は王安石の新法に最も徹底的に反對した人であるが、その意見は王安石に與へて新法實施の弊を指摘した書（司馬溫公文集十）に最もよく窺へる。その要點は、「王安石が祖宗の舊法を變更して利を講ぜしめたが、君子は元來利をはからぬものである。果して輕佻狂躁の小人が多く事を執り、州縣を陵轢し百姓を騷擾せしめるに至つた。王安石は孟子を好むといふが、孟子の意に遠ざかつてゐる。又老子をも好むといふが、無爲にして化すの政を爲さずして却つて徒らに新意を出して以て功名を爲さんと欲してゐる。更に彼は自ら信ずること甚だ厚く、神宗に對しても朋友と私室に爭辯する如くであり、己に迎合する者に親しみ、新法の不便を微言する者にも詬詈以て之を辱めたり追放したりしてゐる。新法の非難天下に囂々たるや、疾と稱して家に籠り、神宗の拔擢委任の意に反して仲々出ようとせず、神宗の手詔によつて漸く出ても益々自己の意見を强硬に持して生民の困窮を顧みない。」と難ずるに在るのであつて、王安石の新法の弊を察するに足るであらう。王安石の失敗の最大原因は、人材を養つて理財の道を講明しつつ適切な手段に出づといふのでなく、小人を用ひても先づ新法の實績をあげようとした點にある。之に對し司馬光は至誠の德を以て民を化せんとする。「資治通鑑」のはじめに德と才とを以て君子小人を別けて德を極めて重視してゐる。彼の思想を窺ふに足る「迂書」には誠を不欺にて說き、治心を論じては意必固我なきを以てし、[註十五]更には無我・公・明・自然等を說いてゐる。所謂性理學からみれば簡單に過ぎるやうではあるが、彼の體驗から大きな理法と道義の世界に觸れ、彼の人格がその裏附けとなつて多くの人に感化を與へたのであらう。

司馬光の見識は朱子の評の如く別に一格を具へたもの

で、當時の政治に多大の影響を與へたが、前述の如く王安石の新法によつて解決を迫られた法と德との統一的立場の確立といふ課題に解決を與へるものではなかつた。これを端的に示すものはその「致知在格物論」である。それは「人の利欲の心は物の誘・迫・蔽によるものであるから、外物を扞禦して後に至道を知り得る。」との考であつて、夫の一事一物に理ありとして我が心のはたらきと合一相應せしめる程子の說とは大いに異つてゐるのである。看來つて司馬光の說には隱逸的・老莊的の考と儒家の思想とが混つてゐるのであるが、それが隱逸思想と倫理思想との上述の周濂溪に見られる如き深い結びつきではなかつた點、司馬光の考は政治家的な考としてその本領を理解すべきかと思はれるのである。

八

王安石に反對し、更には神宗・哲宗の朝に活躍した蘇東坡は北宋後期の思想家として重要な位置を占める。彼は黨爭の禍により何回か貶せられて數奇の生涯を送つたが、それによつて彼獨自の思想と文章とは鍛へられたのである。彼は蜀にゐた時石徂徠の「慶曆聖德詩」を讀んで韓・范・富・歐の四人を尊崇したが、二十二歲にて進士となつて京師に來て歐陽脩に認められ、韓・富からは國士を以て遇せられた。彼等は東坡が范仲淹を識ることが出來なかつたのを殘念がつたと自ら述べてゐる（范文正公集序）。かくて彼は慶曆の風氣に深く觸れるところがあつた。朱子も東坡は天資高明、氣節あり、その議論文詞自ら人の到り得ぬ處ありと評してをり（語類一三〇）、「東都事略」には彼が「氣」に於て勝れてをり、「人中の龍なり」と言つてゐる。彼の特質はこの氣の浩大なる點にあり、彼の文章のすぐれてゐる原因もここにあると思はれる。その「上劉侍讀書」に言ふ、

軾聞く、天下の少き所は才にあらざるなり。才は天下に滿つ、而も事立たず。天下の少き所は才にあらざるなり、氣なり。何をか氣と謂ふ、曰く、是れ名づくべからざる者なり。鬼神ありて陰に之を相くるあるが如し。……凡そ成る所以の者は其の氣なり。其の敗るる所以の者は其の才なり。氣其の才を守る能はざれば則ち焉くに往くとして敗れざらん。世の多く敗るる所以の者は皆其の才を求むるを知りて其の氣を論ずるを知らざればなり。

氣は彼に在つては恰も德の如くである。而してこの氣は佛老の思想にて鍛煉されてゐたのであつて、文學上の活躍に於て歐陽脩を凌駕する理由もここにあると思はれる。氣韻生動して讀者の心を開く藝術的境地が彼によつ

て開拓されて行つた。夫の「前赤壁賦」の「逝く者は斯の如くにして而も未だ嘗つて往かざるなり。云々」に就いて「黄氏日抄」(四十一)に、佛教の性を言ふに本づくと言ひ、朱子も僧肇の物不遷の説に由ると評してゐるが、「前赤壁賦」一篇の眼目はこの一節に在ると考へられる。卽ち一世の雄曹操も今何くに在りやと嘆じ、吾が生の須臾なるを悲しんだ客をして、飜然として喜ばせたのはこの高明の境地なのである。造化流行の動は氣であるが、この氣を永遠の境地に攝するところに悟境が現はれ、この氣をして深く精神的に生動せしめるのであらう。僧肇の物不遷の説は空の立場である。東坡はかかる境地を中・一とも言ふが、彼は氣をして高遠に且つ活潑ならしめ、觸處快活ならしめるが如き境地に立つて儒・佛・老の思想を自家藥籠中のものとしたと思はれる。朱子は東坡の文章が禪家の直截簡易・人の耳目を驚動せしめる點を取り用ひたが爲に、時人が彼の文章に動かされてしまふ。然し彼の横説竪説には眞の道理がないと言ふ(語類一三〇)。蓋し東坡にあつては禪が氣にてはたらいたが故に、その究極的なものは明確に捉へ難くして詠嘆的となるのである。これは文學としては有力な道であるが、性理としてその相を明確に觀ぜんとする立場からは不滿足とされるのは當然であらう。程伊川も「逝く者は斯の如きか。」の孔子川上の嘆を、ただ無窮といふのみでは不十分だと言つたが、この無窮・永遠の直觀から更に一歩進んで、性理を觀ずることが大切といふのが程子・朱子の見解である。これは東坡の説を無用なりとするのではない、否寧ろ東坡を通過することが必要なのである。程子の立場は禪が心にてはたらき、その心に儒の倫理性が天性として自覺されて來るといふ如きものである。その禪が心にてはたらく事の中に、禪が氣にてはたらくことが攝せられると考へられるのである。

かくて東坡や更には禪の思想を考へることによつて程子の學がよりよく理解されることを知り得る。これを北宋前半の隱逸思想を基盤とした靜虛な境地に比して、思想上の大きな變化があることを知るのである。

九

蘇東坡の思想に禪的要素を多く看取し得、司馬光の無爲・自然の説に老莊的な點が窺はれることからしても、熙寧・元豐の頃には禪・老莊の思想が盛となり、當時の知識人の教養の中に深く泌み込んでゐたと考へられる。士大夫・學者達が多く禪に心を牽かれてゆくことに就いては朱子も禪學のよさを十分認めてゐた(詳しくは後述)。勿論司馬光や蘇東坡の如き人々は老莊や禪に溺れたので

はなく、此等を攝取して獨自の思想をつくり上げたわけであるが、此の點が北宋思想界の特質を考察するに重要な點と思はれるのである。本節では朱子の說に依りつつ宋代の禪學と儒學との關連に就いて暫く考察してみたい。

朱子は「佛家は老子の好き處を偷み得たり。後來道家は却つて只佛家の好からざる處を偷み得たり。」（語類一二六）と評してゐるが、佛敎が老莊思想の道・無を眞如・空と融會しつつ、この境地を如來藏思想によつて深く主體的に捉へ、禪學に於て遂に「心」そのものを問題として揭げるに至つて中國の靈性を飛躍的に發展せしめたと思はれる。道を說き法を說くは我がこの一心の問題そのものであるとの自覺によつて、新しい人格の出現をみたと言ひ得べく、而してこれは老莊思想に於て明確に說かれなかつた點である。（かかる靈性を攝して儒を活かしたのが程子である。）朱子は禪家が自己の內面性・靈性の愛護に專念して、學問を爵祿の具として考へず、只此の一事に徹底するが故に一生受用し一生快活である、卽ち常に精神が活きてゐる事を長處としてあげてゐる。そして儒家にこの工夫がない故に敎養ある人々が遂には禪學に入つてしまふのであるといふ（語類一二六）。ここに朱子はこの如き內面性の重視を人間にとつて不可缺のものと考へてゐたことを知るのである。而も朱子は禪家の立場を最上のものとは考へてゐない。彼の最上の境とは、心その靈性を得て、而も理にあたるといふが如きもので、理にあたるとは天性たる倫理性を十全に發揮すること、物に具はる則を得ることなのである。これ卽ち禪學と儒學との融會の問題でもある。蓋し禪家では心の靈性を極めるところが性であり、而して心の靈性は作用卽ち日常の端的の行爲に外ならず、その目指すところは倫理の世界に關はらぬもつと根源的な境地である。ここを捉へれば日常の行動は自ら道理に合すると考へるのであらう。然るに倫理の側から言へば、その如き境は倫理を力あらしめるものではあらうが、その行爲がすべて倫理に合するとは考へられぬことになる。この相違は禪學と謝上蔡との相違として考へてみることも出來るのであつて、上蔡の常惺々は禪家の主人公惺々着に由來しつつも、その靈なる本心・眞心は孟子の惻隱の心にて如實に體せられ、中庸の誠の說にて工夫を積まれてゆくもの、「地步闊くして、身心事物上に於て皆工夫があるもの。」（語類一二六）卽ち儒學の工夫に從つてゐるのである。倫理を天性として徹見するは心の靈性に由るのであるが、禪學と袂を分つ所以ともなる。程子の敬の說の如きもこのやうな消息があることを注意しなければならないと思ふ。

明德を解して朱子は、「人の天に得る所、虛靈不昧にして衆理を具へて萬事に應ず。」と言つた。「天に得る所」とは中國人固有のこころであり、「虛靈不昧」とは禪學にいふ靈性であり、「衆理を具へて萬事に應ず」とはその靈性のはたらき方が倫理的であるといふことである。朱子のかかる考の根本は程子に由來することは論を俟たぬところであり、程朱性理の學の最も重要な問題であるとも言ふべきものである。

十

程子の性理の說を理解する上にも、北宋思想界の幅の廣さを知る上にも、張橫渠の說を考察することは大切であると思はれる。

彼は氣を多く言ひ、太虛・神化を言ふが、「氣」は蘇東坡も重視し、老莊・禪の體認に於ても極めて重要な思想であつて、この氣は北宋後半期の思想を解明する上に極めて重要な問題であると思はれる。而して張橫渠はこの氣の思想を最も深く思索し、倫理的立場と會通せしめた人であり、性理學の理解には張橫渠の說を看過することは出來ないのである。彼は若き頃范仲淹から中庸を授けられ、又程子から得る所が大きかつたが、その苦心思索の結果到達し得た深い境地と嚴密な學說とはその著「正蒙」にて最もよく窺はれる。身邊到る處に筆紙を置いて思索し得たる所を隨時記して練りつめて作られたこの著書は、從容涵泳を重んずる傳統的な考からは上乘とはされないが、宋學にては珍らしく整つた著書である。彼の境地は「神化を窮め、天人を一にする」といふ渾一全的な境地と、「禮を知り性を成し、氣質を變化する」といふ人間性の偏駁夾雜なるを自覺して著實に修爲に心がけるといふ兩面が統一されてゐる點に特長がある如くである。この兩面の相卽は一元氣と陰陽の二氣との相卽を說いて、

兩立たずば一見るべからず、一見るべからざれば兩の用息む（正蒙太和篇）。

といふのと同樣で、この兩面の統一に彼の人格・學說の根柢がある。渾一全的なところに靈性あり、禮を知り性を成すところにその靈性が發揮されるわけである。この樣な思想は朱子の推奬するところであつた（語類九十八）。而してこの靈性は太虛の考にて高められ、氣の說が深く解明せられる。人間存在の窮極の相（性理）がここに明かとなつてくる。彼曰く、

太虛に由りて天の名あり。氣化に由りて道の名あり。虛と氣と合して性の名あり。性と知覺と合して心の名あり（正蒙太和篇）。

これを朱子は「名義甚だ密にして皆不易の至論なり。」（文集五十八答除子融）と評してゐる。これは邵康節の「性は道の形體云々。」をほめたのと同じ考からで（註十一參照）、太虛の考の上に立つて性理學上の基本的な概念を分析してその根柢を明らかにしたことを賞したのである。又張横渠の「心は性情を統ぶる者なり。」も朱子が大いに尊重し、程子の心の解に體あり用ありといふよりも精到と評するが（語類九十八）、これも對なき心、「大心」の考から洞察されたが故であらう。「德性を尊び問學に道るを將つて心と爲す。」と言つて常に全的な捉へ方をするのが張横渠の特長である。そしてこの捉へ方に自から分析的な眼がはたらいてゐるのである。

彼の西銘は當時すでに程子によつて激賞された文章であるが、それは孝の思想を最も高明に說いたもので、孝の宗教的な解釋である。而してそれが理一分殊を說いたものと言はれるのは、宗教と倫理とを會通させてゐるが故であつて、張横渠の說に渾一面と分析面とがある所以であらう。そしてこの宗教と倫理の會通する根本は「吾」である。西銘に、

天地の塞は吾が其の體なり。天地の帥は吾が其の性なり。

とあり、これが西銘の根本である（朱子も然かいふ——語類九十八——）。孟子浩然の氣の說に由來しつつそれを超へたところさへある。氣は人間心裡にあつては情であり、その情は孝に於ける敬と愛とによつて捉へられ、更には同胞愛に說き及ぼされてゐる。而してこの樣な情意に滿ちた吾は存心・養性・知化・窮神といふ哲學的省察を深める所以なのである。天地の塞・天地の帥は張横渠の思想の規模の大を示してゐる。朱子は五十歲の頃南康軍の知となつた時、哲學的にも情意的にも深い裏打ちを持つた西銘の同胞精神による政治を行ひ、社倉法を成功せしめてゐるが、看來つて、王安石の新法の缺陷を補ふべき內面的な德性は張横渠に於て深く解明されてゐるといへようか。彼は又「天地の爲に心を立て、生民の爲に道を立て、去聖の爲に絕學を繼ぎ、萬世の爲に太平を開く。」（文集）と言ひ、天下萬世を以て自任する氣慨を示したが、彼は師儒として道を明かにし得て自らの言葉に恥ぢぬ人であつた。

十一

程明道と程伊川の人物・思想の微妙な相違に就いての考察は宋學研究中での興味ある事柄ではあるが、註十六儒學の眞精神を復興した點、北宋思想界の動向の考察といふ點からは寧ろ兩者に共通した面に注目すべきかと思ふ。伊

川自身、「我の道は蓋し明道と同じ。」（伊川年譜）と言つてをり、朱子も結局は程子として二者を分けなかつた。[註十七] 明道・伊川兩兄弟の學術・思想は大同小異であると考へて差支はない。

明道が政治家として勝れてゐたことは前節王安石のところであげた朱子の評によつても察せられるが、朱子は又「明道は豈に是れ常に循ひ故を蹈み、塊然として自ら守る底の人ならんや。」（語類一三〇）と言つてゐる。その「論十事劄子」は當今の極弊を濟ふには人情事變を重んじつつ、古今を通じて異るなき道理、大理想なかるべからずと主張する。神宗に對しても、「君道を陳ぶるに至誠仁愛を以て本と爲し、未だ嘗つて功利に及ばず。」（明道行狀）といふ。彼は自ら人を感動、風動せしめるところがあり、夫の王安石も彼には一目置いてゐた。而も一面「視民如傷」の句を座右に書して媿づるところがあつたといふ。我々は明道に於て再び范仲淹によつて高く掲げられたところの、學術に裏附けられた高邁な識見と德性に導かれる政治といふ主張を見ることが出來るのであるが、その早逝の爲に政治家としての力量は十分發揮出來ずに終つてしまつた。[註十八] 然し明道の學術・思想は伊川によつて繼承され發展をみた。伊川は侍講となつて學術の重きを以て自任し、僞學の禁を受けつつも終始毅然としてその思想を深めて行つたが、實際政治に就いては特に才能を示すことはなかつた。

次に二程子の學術・思想に就いて考へてみよう。伊川は明道の行狀の中に、

先生の學を爲す、十五・六の時汝南の周茂叔道を論ずるを聞いてより、遂に科擧の業を厭うて慨然として道を求むるの志あり。未だ其の要を知らず、諸家に泛濫し老釋に出入すること幾んど十年、返つてこれを六經に求めて後に之を得たり。

と言つてゐる。この時伊川も共に周濂溪を訪ねたのであるが、若き二程子が道を求むる志を興し、顏子仲尼の樂しむ處や吾は點に與せんの意を示され、吟風弄月以て歸つたことは注意すべきことである。前述の如く隱逸思想と倫理思想とを最も高明に融會して宋代思想の一典型を示した周濂溪の人格と思想とは二程子に深い影響を與へたものと思はれる（後にも觸れる）。而して程子は周濂溪の深く省察するに至らなかつた北宋後半期の思想や社會狀勢の中に生きて、深く獨自に體認する所があつたわけである。明道が、

吾が學受くる所ありと雖も、天理の二字は却つて是れ自家體貼し出し來れり（上蔡語錄、淵源錄引）。

と敢へて言ふのも此の間の消息を察し得る。

而して天理の二字は明道の渾一的な體認を表はすものと思はれる。以下明道の體認を更に考察し、それが伊川に如何に通じ、新法批判に際しても深く要請された「德性」の問題を解決するかに就いて考へてみよう。

識仁篇に曰く、

仁は渾然として物と體を同じくす。義禮智信は皆仁なり。此の理を識り得て誠敬を以て之を存するのみ。

「渾然として物と體を同じくす。」とは明道自らこの篇に言ふ如く西銘と同一見解であり、物と對なき大にして渾然たる境地は張横渠と深く通じ、更にはこの篇に引用された語句によつても孟子に由來するところが大きいのを知る。而してこの様な體認には禪的な常惺々の意が深く生かされてゐることを次の朱子の言葉にて知るべきであらう。

人は只是れ這の一箇の心、裏面に就きて分れて四者と爲る。且く惻隱を以て之を論ずれば、本只是れ這の惻隱、遇ま當に辭遜すべくんば則ち辭遜を爲し、安んぜざる處は便ち羞惡を爲し、分別の處は便ち是非を爲す。若し一箇動底醒底の裏面に在るなくんば便ち也た羞惡・辭遜・是非を知らず。譬へば天地の如し、只是れ一箇の春氣、發生の初は春と爲し、發生し得過ぐれば夏と爲し、收歛すれば秋と爲し、消縮すれば便ち冬と爲す。明年又春より起る。渾然として只是れ一箇發生の氣なり（語類九十五）。

識仁とは義禮智信を一貫した仁を體認すること、それは惻隱の心が羞惡・辭讓・是非を一貫し、天地の生意が四時を一貫して常に生々としてゐるが如くである。ここにその體認は常醒々・活潑潑地のものであることを知り得るであらう。これは前述の禪的境地が生かされてゐるのである。識仁の二字には以上の如き體認が含まれてゐる。而して仁と言ひ、惻隱の心と言ひ、天地間の生意と言ふ、ここに孟子に於て深められた儒教の精神の復興を看得し得る。朱子が孟子四端の章の集註にて、明道の、

滿腔子是れ惻隱の心。

謝上蔡の、

人須らく是れ其の眞心を識るべし。乍ち孺子井に入らんとするを見る時に方りて其の心怵惕す。乃ち眞心なり。思ひて得るにあらず、勉めて中るにあらず、天理の自然なり。

を引用してゐるのは鋭き見解である。上蔡の眞心は禪的であり乍ら、一面中庸の誠の說を生かして渾然たる境地をよく指示する。明道の天理・誠敬の說もここから理解することが出來る。明道の體認に中庸と孟子が最も根本となつてゐることも明かであらう。

右の如き境地を伊川は、

心は生の道なり。是の心あれば則ち斯に是の形を具へて以て生ず。惻隱の心は人の生道なり。心は譬へば穀種の如し。生の性便ち是れ仁、陽氣發する處乃ち情なり。

と言ふ。明道の如き渾然たる大きな體認の語ではないが、明道に深く通じつつ新しい世界を拓いてゐる。伊川の說には常に分析眼がはたらいてゐる。生の性を仁と言ふは明道の識仁の說と大いに異つて、夫の性卽理の世界に向つて立言されてゐると言へよう。而も伊川の說を眞に理解するには前述の明道の境地を經なければならないのである。

次に、明道の全的で醒々・活潑な體認は定性書の、「動も亦定、靜も亦定。將迎なく內外なし。」・「廓然として大公、物來りて順應す。」の境地でもある。深く一貫し主體的なる境地であつて、伊川の主一無適の敬說にも通ずる。主一無適といへば一事に滯るのではなく、周流窮りなき活潑の境を踏へてゐる。而も明道の誠敬と稍々異るところは純粹至善の靜的な性理の世界により近いといふ點である。これは主一といふ事に由來する。この一は動靜を超へ、動靜共に定なりとみつゝ靜の世界に相應する。主靜の說は周濂溪に於ても最も重要なものであり、明道・伊川共に靜坐に深い關心を寄せてゐた。「靜後萬物を見れば皆春意あり。」と言ひ、又「萬物靜觀すれば皆自得す。」と詠じて、靜の工夫が前述の仁の體認に通じ、又萬物の自得の境を得る所以、卽ち理一分殊の世界を得る所以であることを述べてゐる。この靜は定性書の定に外ならないが、靜といふところに全的な境地を踏へつつ、動による惡の起源を觀ずる眼がはたらく。伊川の好學論はこの處を論じてをり、故に伊川が敬を說いたのは自然のこととも思はれるのである。誠敬は言はば天の位にあつて渾然、中庸に所謂「誠は天の道なり。」に當り、主一無適の敬は人の位にあつて而も天位に迫る、中庸に所謂「之を誠にするは人の道なり。」に當る（註十六參照）。而して人の位からみれば天位の天理・一理として顯はれ、それへの途として格物窮理と積累の工夫が說かれるわけである。

かくて二程子によつて解明せられた「德性」は、周濂溪や張橫渠、更には禪家の境地に深く通じつつ孟子並びに中庸の說を千載の後に復興して得られるものであることを知る。而してこの德性ありて王道政治も可能であり、王安石の新法批判の根據も確立するわけである。更には、格物窮理をその自覺の途とする程子の說は、王安石の提出した宋朝の國家機構に應ずべき新しい政治の理

念の要請に當り得るものであつた。（これは更に朱子を經て全體大用の政治思想と發展した。）司馬光にあつては格物は外物の誘を扞禦することであつたが、伊川では、或は讀書して道義を講明し、或は古今の人物を論じて是非を別ち、或は事物に應接して其の當否を得、或は天地鬼神の高深幽顯なる所以、一草一木の然る所以を窮める事である。これは大學の八條目、否儒學の全體を大きく發展させることであり、夫の理財の法への顧慮もこの中に含まれる。道理・理法の世界が開かれ、大學の天下國家的立場で捉へられるに至つて新しい政治理念が眞に主張されるのであらう。而もそれは根源的な德性に裏附けされたものである點に意義があると言ひ得よう。大學の格物致知の工夫の前に、誠敬・居敬の工夫があるのは、格物致知をして右の様な意義を持たしめるためである事を知るべきである。

程子の格物の說は朱子の大學或問の中に整理されてゐて極めて明快であるが、そこに朱子は「本源を涵養するは格物致知の本」と言ふ。本源を涵養するとは誠敬・敬を以て內を養ふことである。自己の心性の根柢を省察することは萬物の性情を得る所以であり、心の深き者は物を深く觀るわけである。渾一的な體認は天理・一理を捉へるが、これが窮理の本となることを程子は次の如く言ふ、

萬物各々一理を具へて萬理同じく一原より出づ。此れ推して通ぜざるなき所以なり。

物我一理、纔に彼を明かにせば卽ち此を曉る。此れ內外を合するの道なり。

かくて格物窮理は物我一理の全的體認を本とする。格物を外にある物の理を窮めるといへば殆どその意を得ないのである。然るにこの一理は全的にして前述の所謂天位にあるもの、格物窮理は一事一物に卽きて其の理を窮め、積累久しきに及んで豁然・脫然として悟る外はない。人位を盡して天位に悟入するを期するわけで、これ程子の最も靈妙なところである。人位の修養を儒學の根本と學考へるならば、伊川の說くところこそ最も儒敎的であり、明道や周濂溪の說には禪や老莊に相似た點が多いとも言へるであらう。而して伊川の根本的な主張は十八歲の時胡安定に提出した好學論に已に表明されてゐると見ることが出來よう。そこには眞にして靜なる性理の世界を本として認め乍らも、人間の現實の惡の免れ難き點を忘れない用意がある。而して動靜を超えた靜の上に立つて性理の世界を明かにすることによつてその惡は解消するのである。程朱學で窮理を根本とする一大眼目は實にここにあるのであらう。この事は伊川が黨禍に遭ひ培州

に流され、又後には僞學の禁を受け乍らもその學を廢しなかつた如き毅さを生む所以となる。易を解するに當つて、その隱逸者に好まれ、逆境にある者には自己の命運を觀ずるの書とされ、象數を弄するに至り易き書であるにも拘らず、倫理的立場を堅持して易傳を宗成した伊川の態度に注意されるのである。彼は實に理に忠實無比の人であつた。

かくて程子の說は中庸と大學を深く解し、更には孟子を活かしてゐること、而して宋代の思想は程子に於て統一されたことが明かとなつた。「仁宗以前には進士合格者に禮記儒效篇を賜つたが、天聖五年には中庸を與へ、八年には大學を與へた。其の後はこの兩書が交る交る賜與された。」（吉田清治氏著北宋全盛期の歷史）といふのをみれば、程子の業績は宋代の思想の根本を導くに足るものであつたと言ひ得よう。ただ程子が現實に生きた時期は、新法實施とその後の黨爭の激化の時期であつた。程子は僞學の禁を受け、弟子達は禪學に走つたが、未發の中を純粹に守つた李延平の下に朱子が出て宋代性理の學を集大成した。而して朱子が最も深い影響を受けたのは二程子、就中程伊川であつた。

註一　張方平が王安石に答へた語。南宋大慧宗杲の「宗門武庫」に載す。

註二　三十九歲の時宰相に遣つた書（集卷八）に曰く、「夫善國者莫先育材、育材之方莫先勸學、勸學之要莫尙宗經。宗經則道大、道大則才大、才大則功大。蓋聖人法度之言存乎書、安危之幾存乎易、得失之鑒存乎詩、是非之辯存乎春秋、天下之制存乎禮、萬物之情存乎樂。」

註三　仁宗朝のはじめ劉皇太后が垂簾の政を行つた時、仁宗は百官を率ゐて皇太后の壽を上らんとしたのを范仲淹は否とし、更に政を還さんことを請うた。多くの人は劉太后の權勢に媚びてゐたのであつた。然るに皇太后沒し仁宗親政となるや、皇太后を非難する人があつたが、范仲淹は却つて辯護した。又仁宗が郭皇后を廢せんとした時、これを難じて宰相呂夷簡と對立した。

註四　宋史列傳に曰く、「自古一代帝王之興、必有一代名世之臣。宋有仲淹諸賢無愧乎此。仲淹初在側中、遺宰相書極論天下事、他日爲政盡行其言。諸葛孔明草廬始見照烈數語、生平事業備見於是。豪傑自知之審、類如是乎。攷其當朝、雖不能久、然先憂後樂之志、海內固已信其有弘毅之器足任斯責。使究其所欲爲、豈讓古人。」この文は蘇東坡の「范文正公文集序」の說を採るところ大。范と蘇とのことは蘇東坡の項にて少しふれる。なほ「黃氏日抄」には范仲淹が晩年多く外にあり、終には邊事に死んだことを指摘し、悲劇的な人として捉へてゐる。然しこの說には全面的に從ひ難い。

註五　蘇東坡は彼の文集（居士集）の序に於て、「宋興七十

餘年、民不知兵、富而教之、至天聖景祐極矣。而斯文終有愧於古、士亦因陋守舊、論卑而氣弱。自歐陽子出、天下爭自濯磨、以通經學古爲高、以救時行道爲賢、以犯顏納說爲忠、長育成就、至嘉祐末號多士。歐陽子之功爲多。」と言つてゐる。又彼は十歳にして韓退之の文を愛讀したが韓琦が仁宗に歐陽脩をすすめる時「今の韓愈なり。」と言つた（名臣言行錄後集卷一）。

註六　朱子曰「歐公文字鋒刃利。文字好、議論亦好。嘗有詩云、玉顏自古爲身累、肉食何人與國謀（居士集十三、唐徽公主手痕、和韓內翰）。以詩言之第一等好詩、以議論言之是第一等好議論。」（語類三九）。

註七　宋史列傳に曰く、「琦相三朝立二帝、厥功大矣。當治平危疑之際、兩宮幾成嫌隙。琦處之裕如、卒安社稷。人服其量。歐陽脩稱、其臨大節決大議、垂紳正笏、不動聲色、措天下於太山之安、可謂社稷之臣。豈不信哉。」卽ち仁宗に子がなかつたので、彼は「太子天下本、不可不豫立以係天下心。」と仁宗にしきりにすすめて、やうやく英宗を立てしめ、又光獻太后垂簾の政をやめしめた。更には多病の英宗を輔け、英宗の病革るや、神宗を立てしめて中外の憂懼を防いだ。

註八　宋史隱逸傳に曰く、「中古聖人之作易也、於遯之上九曰、肥遯、無不利。蠱之上九曰、不事王侯、高尙其事。二爻以陽德處高地、而皆以隱逸當之。然則隱德之高於當世、其來遠矣。蓋由雖不見於經、其可誣哉。五季之亂避世宜多、宋興嚴穴弓旌之招、疊見於史。然而高蹈遠引、若陳摶者終莫得而致之。豈非二卦之上九者乎。种放之徒召對大廷、亹々獻替、使其人出處果有合于艮之君子時止時行、人何譏焉。」と。これは隱逸の意義を十分に認めた論である。

註九　これには禪的な活機と靈性が要請されるが、これが程子の課題であつた（詳しくは後述）。周濂溪ではまだ沈潛清澄の境である。

註十　困學紀聞十八、評詩に「更無柳絮隨風舞、惟有葵花向日傾。可以見司馬公之心。浮雲世事改、孤月此心明。見東坡之心。」とある。司馬光には「獨樂園記」があることにも注意される。

註十一　諸先生說這道理、却不似邵子說得最着實。這箇道理纔說出只是虛空、更無形影。惟是說性者道之形體、却是得實有。不須談空說遠、只反諸吾身求之、是實有這箇道理。……邵子忽地於擊壤集自說出幾句、最說得好（語類百）。

註十二　朱子の邵康節畫像贊は「天挺人豪、英邁蓋世。駕風襲霆、歷覽無際。手探月窟、足躡天根。閑中今古、醉裏乾坤。」これ隱逸家に對する非常な贊辭である。周濂溪畫像贊は「道喪千載、聖遠言堙。不有先覺、孰開我人。書不盡言、圖不盡意。風月無邊、庭草交翠。」これ隱逸思想を生かしつつ倫理をすぐれた說いたことに就いての贊辭である。

註十三　朱子と陸象山との論爭を來したこの一句は、倫理の根柢を培つた隱逸思想の意義といふ面からとらへることも出來るし、これを尊重した朱子には隱逸思想に對する深い理解があつたと言へるのである。

註十四　この劉子は王安石自身見聞した仁宗朝のことが最も詳しく、彼は仁宗の寛仁恭儉による治を一應は認め乍らも、政事が「一切因任自然之理勢、而精神之運有所不加、名實之間有所不察。君子非不見貴、然小人亦得蘇其間。正論非不見容、然邪說亦有時而用。以詩賦記誦、求天下之士、而無學校養成之法。以科名資歷敘朝廷之位、而無官司課試之方。……上下偸取容而已。雖有能者在職、亦無以異庸人。農民壞於繇役、而未嘗特見救恤。其於理財大抵無法。故雖儉約而民不富、雖憂勤而固不强。賴非夷狄昌熾之時、又無堯湯水旱之變、故天下無事過百年。雖曰人事亦天助也。……知天助之不可常恃、知人事之不可緩怠、則大有爲之時正在今日。」（文集五）

註十五　無爲の贊に曰く、「治心以正、保躬以靜。進以退有義、得失有命。守道在己、成功則天。夫復何爲、莫非自然。」彼の思想には新法に反對して野に在り、邵康節と交つた事による影響が考へられる。

註十六　明道之言、發明極致、通透洒落、善開發人。伊川之言、卽事明理、質慤精深、尤耐咀嚼。明道之言、一見便好、久看愈々好、所以賢愚皆獲其益。伊川之言、乍見未好、久看方好、故非久於於玩索者不能識其味。明道渾然天成、不犯人力。伊川功夫造極、可奪天功（朱子文集三十一答張敬夫書）。

註十七　明道は五十四歳にて沒し、兄と一つ違であつた伊川は七十五歳で沒した。全祖望曰、「大程子早卒、向微小程子則洛學之統且中衰矣。蕺山先生嘗曰、小程子大而未化、然發明有過於其兄者。信哉。」（宋元學案卷十五）。

註十八　神宗の死後、司馬光・呂晦叔が相となり、明道も呼ばれたが、「未行以疾卒。宗丞（明道のこと）爲溫公申公所重。使不早死、更相調護協濟於朝、則元佑朋黨之論無自而起矣。」この說をきいて邵伯溫は今に四十年、其の言益々驗ありと言つてゐる（淵源錄引、邵氏聞見錄）。